時間を売る男

「……いま、何て言ったんだ？」
　唐突な一言に驚いてティーカップから手を放しそうになってしまった。
　動揺する僕を尻目にかけるような表情で彼女は煙草の火を灰皿に落とす。そして一息つくとこちらをしっかり見据えてもう一度言った。
「だから、別れよう、って言ったのよ」
　聞き違いではなかった。
「何言ってんだよ！？　何を今更……冗談だろ！！？　冗談だよな！？」
「静かにしてよ。そういうところが嫌になったって言ってるの」
　じろりと僕を睨む彼女。
　少し声が大きすぎてしまったらしい。僕たちは店内の客たちの好奇の視線にさらされていた。ジャズの流れる静かな日曜の午後に似つかわしくない声を出してしまったのは、僕の自業自得ではあった。
　それにしてもこの女、どうしてここまで動じないのか。
「本当に女々しいのね。そういう周りのことを考えない自己中心的なところが嫌になったって言ってるのに。あとは……飽きたっていうか。まあ、何でもいいわ。
私はもうあなたとやり直す気はないから」

　彼女と出会ったのは三年前のことだった。思えば、運命的な出会いだった。大学に入学した年の冬に、僕が学食に忘れていった携帯を学生課に届けてくれたのが彼女だった。
それがきっかけで知り合って、後からたまたま同じ授業をとっていたこともわかって、僕が入ったサークルにも彼女は入っていて、バイトの面接を受けてみればそこに彼女がいて……
友達からはストーカーなんじゃないかって笑われるほど、僕の行く先々に彼女がいたものだ。
　――これは運命だ。お互いにそう感じるまでそう時間はかからなかった。
僕のほうから告白して、彼女も快諾してくれて……それからはずっと一緒だった。どんな時も一緒にいたよな。
誰からも羨ましがられるような仲睦まじいカップルだった。
　僕の進路も決まり、卒業後は結婚だね、って話になって……お互いの両親を紹介しあったのは先月のことだ。
喧嘩だってすることもなかったし、本当にいつまでも隣で笑い合えると思っていたのに……どうして……

　真っ赤に染まった空をバックに、高層ビルが街に暗い影を落とす。あまりに突然の出来事に呆然としながら、とぼとぼと夕焼けの街を歩き続ける。
ビルの隙間から顔を現した夕陽が僕を照らす。日陰の中を歩いていた僕は突然スポットライトを当てられたような気がして、惨めな気持ちに追い打ちを受けた。
　思わず路地裏を曲がり、日の当たらぬビルの間に逃げ込んでしまった。
　――その人は、そこにいた。

「お若いの、辛気臭い顔をして……どうしたんだね？」
　最初、自分に声をかけられたのだと気づかなかった。が、この薄暗い路地裏には僕とその老人以外に人影など見当たらない。
汚い白髪をドレッドのように束ねていて、薄汚れた格好で地べたに座り込む男。目の前に風呂敷を広げ、そこに色々な品物を散りばめている。
長い髪の隙間から見え隠れする目が真っ直ぐにこちらを見つめる。
　一目見て関わりたくないと思った。どう見ても堅気の人間には思えない。浮浪者なのか、それとも酔っぱらいなのか。
しかしスルーするにはタイミングを逃してしまった。
彼から話しかけられたことに反応して振り向いてしまった以上、無言で立ち去るのは少し抵抗があった。
「ええ、ちょっと……」
　適当に言葉を濁し、そのまま通りすぎようとした。
「時間を戻したい……そうお思いかね？」
　あまりにも突拍子のない言葉。
時間を戻したいと思ったことはない、とは言わない。今だって戻せるものなら戻してみたいとは思う。
でも、それは僕の個人的な感情であるし、十秒前に初めて言葉を交わし、今後一生交わることなく別れていく人と話すような内容ではない。
　さらに付け加えるのならば、いきなり時間を戻したいかなどと聞いてくるような危ない人間と関わりたいとも思わないし、思えない。
　僕は彼の言葉に返事してしまったことを後悔し、そのまま無言で路地を通りすぎようとした。
「結婚まで考えていた彼女にふられて落ち込んでいるのだろう？　私は時間を売る人間だ。わからないことはない。私の話を聞いてみる価値はあると思うが」
　病んでいたのかもしれない。
あんな怪しい男の言葉を流せず、二度も三度も反応してしまうとは。

「ただいま」
　マンションの鍵を開け、誰もいない部屋になだれこむ。
上着も脱がず部屋の電気もつけずに寝室に行く。そのままベッドに横になり、思い切り伸びをする。
「はぁ……」
　左手には古めかしい錆びた腕時計がはめられている。
「こうやって他人の押しに弱いところも嫌われる原因なんだよな……」
　窓の外の夜景にわずかに照らされるだけの真っ暗なベッドの上で時計を見つめながらポツリと独り言を呟く。
　あの老人は時間を売っていると言った。
時間も土地と一緒で、所有者が存在する――それが老人の言い分だった。
　自分に所有権のある時間は自分の好きなだけ何度でもやり直すことが出来る。この時計があれば、時間を購入する権利が得られる。
時間は開始時刻から15分単位で購入出来るそうだ。
　例えば、2012年の5月21日の22時00分から15分間を購入したとする。
そうすれば僕はその時間の所有者として、納得いく結果が出るまで、何十回、何百回でも5月21日の22時から15分間をやり直すことが出来るわけだ。
　ただし、時間を購入するというのは相応のリスクもあり、15分間の時間を所有するためには1年間の寿命を対価として支払わなければならない。
複数の時間を購入して寿命を縮めるよりより、購入した時間を有効に使って満足な結果が出るまで、何度もやり直しながら色々試してみるといい。
　老人はそう言っていた。
　じゃあ、例えば僕がふられた昼過ぎまで戻って、何度もやり直しながら彼女の不満を解消出来れば、やり直せるかもしれない。
　――馬鹿らしい、何あんな小汚い男の言うことを信用しているんだ。これだからふられるんだよな……

　でも……もし、本当だったら……
　僕は、時計のカレンダーを今日の午後2時にあわせた。

「……いま、何て言ったんだ？」
　唐突な一言に驚いてティーカップから手を放しそうになってしまった。
　動揺する僕を尻目にかけるような表情で彼女は煙草の火を灰皿に落とす。そして一息つくとこちらをしっかり見据えてもう一度言った。
「だから、別れよう、って言ったのよ」
　聞き違いではなかった。
『何言ってんだよ！？　何を今更……冗談だろ！！？　冗談だよな！？』
　――そう言いかけたが、彼女は興奮しやすい僕のことが苦手だと言っていた。女々しい、とも……
「別れる……？　どうして…？」
　心臓がバクバクと脈打っているが、動揺を悟られないように声を押し殺して言った。
「意外ね……もう少し驚くと思ったんだけど。でも、いいの。もう飽きちゃったから……」
「飽きた？　飽きたって何だよ。どういうところが？」
「どういうところも何も、前々から飽きてたから……ごめんね。やり直す気はないの」
　彼女は伝票を置き、立ち上がった。
「この数年間、本当に楽しかったわ。それは感謝してる。でも、私たちこれ以上進めないと思う。ありがとう、さようなら」
　そう言うと彼女は喫茶店の出口に向かって歩き出した。
　口をつけずに残されたアイスティーを見つめながら、僕は呆然としていた。

――本物、だったんだ……
　僕の寿命も……減ってしまったのか？
しかし、自分の体には変化らしいものは起こっていない。
　中学の頃、好奇心から煙草を吸ってみた時のような……何か、いけないことに手を出してしまった――そんな緊張感が僕の体を包み込んだ。
でも、やり直せたのは紛れも無い事実だった。
　僕は、左腕の腕時計を見やった。
そして、すぐに時間をやり直す。
　今日の午後2時から15分間は僕の所有物なのだ。
何度でも、気が済むまでやり直せる。
　彼女の気が変わるまで何十回でもやり直してみせるさ。

「……いま、何て言ったんだ？」
　静かにティーカップを下ろす。
　かちゃり、とカップが置かれる音を立てる。彼女は無言で煙草の火を灰皿に落とす。そして一息つくとこちらをしっかり見据えてもう一度言った。
「だから、別れよう、って言ったのよ」
「飽きた、とでも言いたいのか？」
　彼女は少し驚いたように目を丸くした。
「確かに俺達はもう付き合いは長いよ。でも、飽きたから終わりとか、そういう仲じゃないと思うんだよ。倦怠期なんて誰にだってあるさ。
そんなことでいちいち別れていたら世の中の夫婦だってほとんどが離婚しちまう。
大事なのは別れることよりも二人で乗り越えることじゃないのか？」
「ふうん……あなたにそこまで気が回るなんてね。でも、違うの。そんな単純な問題じゃないのよ」
　ん……？　確かさっきは「飽きた」と言っていたはずだが。
「単純な問題じゃないって……？　どういうことなんだ？」
「……いつかは言わないと、って思ってたんだけど……」
　ためらいがちにため息をついてから彼女は言った。
「……好きな人が、出来たのよ……」
　彼女は伝票を置き、立ち上がった。
「この数年間、本当に楽しかったわ。それは感謝してる。でも、私たちこれ以上進めないと思う。ごめんね……さようなら」
　そう言うと彼女は喫茶店の出口に向かって歩き出した。
　口をつけずに残されたアイスティーを見つめながら、僕は呆然としていた。
　そんな馬鹿な！　好きな男が、って……浮気、されてたのか？
気づかなかった……他に男がいるんじゃ、何度やり直したって結果は変わらないじゃないか。

「……いま、何て言ったんだ？」
　何度目かになる言葉を聞きながら静かにティーカップを下ろす。
　かちゃり、とカップが置かれる音を立てる。彼女は無言で煙草の火を灰皿に落とす。そして一息つくとこちらをしっかり見据えてもう一度言った。
「だから、別れよう、って言ったのよ」
「俺以外の男が出来たからか……」
　彼女は驚いたように目を丸くした。
「気づいてたの？」
「ああ……いつからだ？」
「……ん……去年のクリスマスから……あの日、あなたと駅で別れてから出会ったの……」
　きょ、去年から？
実家に帰ったと言っていたのは嘘だったのか。
あれからずっと僕に気づかれないよう半年以上男と出会っていたなんて……
　これにはさすがの僕でも頭に来た。
だったら去年のクリスマスも購入して、二人の出会いを潰してやる。
　僕は腕時計のカレンダーをぐるぐると乱暴に回し、12月25日に設定した。
確か、実家に帰ると言った彼女を駅に送ったのが18時頃だったはず。そこからやり直そう。
　ーー18時、と……よし、オッケー。

　僕と別れ電車に乗る彼女を捕まえておけばその男との出会いもなくなるはず。
やってやろう。

と、思っていたが、辿り着いたのは僕の記憶とは違う場所だった。
僕の記憶していた時間が間違っていたのか？
左腕の時計を確認すると、それは3年前の日付を指していた。
カレンダーを巻き戻した時に、年の設定まで触れてしまっていたらしい。
何てこった。就職まで決まっていたのに、もう一度一年生からやり直さないといけないのか。
　僕は、軽く絶望してしまった。
この年のクリスマスは僕と彼女が出会う少し前である。
出会いから彼女を退屈させないよう気遣いながら過ごせばある意味では目的を遂行することは容易だが、これからの先の長さに軽いめまいを覚えてしまった。
　プラスに考えよう。もう一度大学生活をやり直す機会なんて、滅多にあるものじゃない。
うん……これは恵まれているのだと思おう。
無理やり自分を納得させる。
　ところで、ここはどこなんだろう。
と辺りを見回してみる。
　どうやら、新宿駅の近くだったようだ。
ここは……あの老人と出会ったところだ。
3年も前のことだし、あの人がいるとも思えない。
しかし、目先の目標を失ってしまった僕は、特に理由もなく、時間売りの老人と出会った路地裏に歩を進めていた。

　冬の夕方は真っ暗で、僕は凍えながら僕はビルの角を曲がり、あの路地裏に入った。
　意外なことに、老人は、そこにいた。
しかし、もっと意外であったことは、先客がいたことだ。
　コートを着込んでいて顔や年齢ははっきりわからないが、雰囲気から若い少女だと思った。
　あまり他人のプライベートに干渉するのはよくないと思ったので、会話が聞こえぬよう間合いに気遣いながらビルの壁に背中を預けた。
さっきまで春にいた僕にとっては冬の夜は寒すぎる。
　しもやけにならないよう指先にハーハーと息をかけながら、二人の会話が終わるのを待った。
　所々聞こえる会話から想像するに、少女は老人の常連客のようだった。
「〜〜がうまくいった」とか、「今度は〜〜したい」などと近況報告をしながら雑談に花を咲かせているようだ。
僕はあの老人のことが好きではなかったのに、何となく軽い嫉妬を覚えてしまった。
　自分の勝手さをおかしく思いつつ時計に目をやった。
あーあ、僕の所有時間はもう終わってしまった。
　無意味に寿命を一年損してしまったな……そのぶん、短くても充実した人生が送れるようこれからは人生の岐路の時間は所有してしまおうかな。
それともギャンブルに手を出して、大穴を当てるまで何度もやり直すのもいいかもしれない。
　そんなことを考えていたが、二人の会話がなかなか終わらないのでだんだん退屈になってきた。
老人と話す必要もないのだが、「間違えて購入した時間は返品出来ないか」など、聞きたいことだってたくさんある。
　買い物が終わったのなら、早く立ち去ってくれないだろうか。後ろがつかえているんだ。
そもそも、さっきから何の話をしているのだろう。
あまりに暇になってきたので携帯をいじくりながら順番を待っている第三者のように装いながら、二人の会話の内容に耳を傾けてみた。
　少女は、老人に恋愛相談をしているようだった。
断片的に聞こえてきた話をまとめると、少女には好きな男がいる。
彼女は老人から色々な不思議な道具を譲ってもらい、その道具で意中の男の私生活や好み、サークルなど色々な個人情報を手に入れたという。
しかし自分から行動を起こすのはプライドが許さない彼女は、男のほうから自分に惚れるように細工してみることにしたのだと言う。
　過去に戻り、サークルやバイトにも先に入って何度も運命的な出会いを繰り返す。
男の好みだって知っているし、そうすれば男のほうから私に告白してくれるはず。
告白されなければされるまでやり直しながら何度も時間を繰り返せばいいだけだ。
　おっ、どうやら二人の会話もようやく終わりの時がきたようだ。
「きっとうまくいくわ。男なんて馬鹿だから、運命なんていくらでも作れるもの」
そう笑って振り返った少女の顔は、僕のよく知る彼女だった。

【P'z books no.1】時間売りの男

http://p.booklog.jp/book/50782

著者：さとし
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/sats/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/50782

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/50782

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ